

私たちの自然



公益財団法人 日本鳥類保護連盟
Japanese Society for Preservation of Birds

生きものはつながっている
◆イソヒヨドリ
◆ニホンカナヘビ

●庭に小鳥を 駅前の庭に息づく、生態系
●フィールド探検をやってみた ツグミになりきって地面の餌を探してみた



2026
3・4
No 663

2026年(令和8年)3月1日発行(隔月1回・1日発行)通巻663号 ISSN0910-6987

南西諸島のクイナたち

沖縄県で撮影

沖縄県の南西諸島に行くと、本土では見ることのできないクイナ達に出会えます。種類によってはなかなか姿を現さないものもありますが、どんな鳥に出会えるか、行く度にワクワクしてしまいます。

江口欣照（東京都府中市）



ヤンバルクイナ



オオクイナ



シロハラクイナ



ツルクイナ

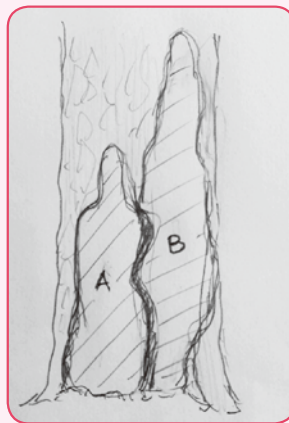
植物豆知識〈42〉 お散歩目線で① ケヤキの幹を這うものは？



ケヤキの大木の幹に何かが這っています。観察すると広範囲に欠損した樹皮の癒合組織（本誌 656 号参照）でした。簡易な展開図を描きながら推理すると…。何らかの原因で A の欠損が出来て癒合組織が発達した後に B の欠損が出来たことで（逆順でも同様です）両者の癒合組織が不思議な形で残りました。もしも A と B の欠損が同時に起きれば全体が一つになったはずですが。2 つの隣接する樹皮欠損が時間差で出来たことで不思議な形となったのです。極めて珍しい事例でした。

杉崎光明（樹木医・東京都江戸川区）

*所在地：六義園（東京都文京区本駒込 6 丁目）入口の前方「岩崎家の蔵」の付近



スタッフだより

ハシボソガラスの一人遊びを見てしまった…

青空を見上げると、ハシボソガラスが急上昇、急降下を繰り返していました。何をしているのだろう？ と目で追っていると、なんと丸い石のような物を空中にポイッと放り投げ、落下する石を器用に空中でキャッチしていました！ もしかして、一人遊び！？ その時、取り損ねた石が目の前の地面に落ちてきました。舞い降りてきたハシボソガラスがその石を拾い、こちらをチラリと一瞥。まるで「見たなあ～」と言っているかのようでした。

岡安栄作（普及啓発室）



VOL.67



NO.663
MARCH
APRIL
2026

私たちの自然



第 67 巻 No.663 2026 年 3・4 月号

- 2 庭に小鳥を 駅前の庭に息づく、小さな生態系 (吉田裕樹)
- 4 フィールド探検をやってみた
ツグミになりきって地面の餌を探してみた (岡安栄作)
- 6 分布が変化している日本の鳥 (植村慎吾)
- 8 羽根探偵の謎解きファイル ～エピソード7～ (郷上マナツ)
- 11 第 1 回 子ども鳥博士 in 小田原 開催報告
- 12 生きものはつながっている
イソヒヨドリ (鳥居憲親)
- 14 生きものはつながっている
ニホンカナヘビ (久保軍馬)
- 16 ネイチャーポジティブと自然共生サイトと地域づくり (奥田青州)
- 18 登録者のバードピア紹介
小河原孝生様宅バードピア
- 19 連盟小鳥用巣箱のご紹介
- 20 私たちが自然保護活動から学んだこと その 1
(第 59 回全国野生生物保護活動発表大会 発表校)
- 21 全国一斉テグス (釣り糸) 拾い 2025 報告
- 22 支部会議と支部交流会報告
- 23 連盟だより / インフォメーション
使用済み切手・カード類提供のお願い / 商品の注文について /
バックナンバーの提供について / 会費の有効期限の見方 / 広告募集 /
編集後記

ネイチャーフォト
南西諸島のクイナたち (江口欣照)

植物豆知識〈42〉 お散歩目線で① ケヤキの幹を這うものは? (杉崎光明)
スタッフだより
ハシボソガラスの一人遊びを見てしまった… (岡安栄作)

表紙のことば

鳥居憲親 (長岡市立科学博物館)

岩礁の攻防

(5 月、新潟にて撮影)

岩礁の高台で、なわばりを見張るオス。この岩場に巣があります。すぐ近くではハヤブサも子育てをしており、イソヒヨドリを狩りにやって来きます。自分の子孫を残すため、ハヤブサをかわしつつライバルオスを追い払う日々に明け暮れながら、オスは静かに海を見つめています。



駅前の庭に息づく、小さな生態系

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 普及啓発室 吉田裕樹 文・写真

「庭に小鳥を」というテーマのもと、今号では当連盟の小宮輝之会長のご自宅の庭を取材しました。1月末に訪れたのは、都内西部にあるマンション1階の庭です。目の前には高架の線路が走り、半径100m以内には大型施設や飲食店が立ち並ぶ、典型的な都市環境にあります。

会長がこの地に住まれてから、52年が経つそうです。当時、周辺には田んぼや畑が広がり、スズメのお宿の竹林までありましたが、現在その面影はほとんど残っていません。しかし、この庭には、身近な野鳥が採餌や水浴びに訪れ、さらには営巣まで行うだけではなく、かつての環境に依存していた生きものの一部が今も生息しているそうです。その理由や、生きものを誘致する工夫・注意点について話を聞いてきました。

●生きもののための環境づくり

駅からかなり近いというのはわかっていましたが、到着すると想像していた以上に線路と近く、建物も多い場所です。庭を囲むように植栽はありますが、冬ということもあり、樹木は葉を落としていたため、「この環境で生きものが利用するのかな」というのが外から見た印象でした。入室した後、会長から庭に置いてあるアイテム、観察できる生きもの、庭づくりの考え方などをうかがいました。

まず目につくのは、やはり水場や巣箱など、野鳥

を誘致するためのアイテムです(写真1)。庭にはバットや鉢受けを地面に置いた簡易なバードバスが設置されていました。水は適当に注ぎ足しているそうです。ヤマザクラやウメ、キンカンなどの鳥が食べる実がなる木が植栽されていました。これらの木は営巣木にもなるのでスズメ、シジュウカラ、メジロ(写真2)、ヒヨドリ、キジバトがこの庭で繁殖したそうです。ヤマザクラはほとんど枯れてしまっていますが、あえて残し、アオゲラやコゲラが繁殖することを期待しているそうです(写真3)。ただし、折れる心配があるため、定期的なメンテナンスが必要とのことでした。枯れかかったヤマザクラからは毎年タマムシが発生し、渡りの途中のアオバズクが休んだり、ツミに狩られたキジバトやスズメの羽が根元に散らばっていることもあるそうです。

一方で、餌台は何カ所かありましたが、いまは餌を置いていないとのこと。餌を置いていた時期もあるそうですが、ネズミが利用することがわかったため、周辺住民への配慮から中止したそうです(写真4)。粘着シートの鼠捕りを仕掛けたところハツカネズミも捕れ、イエネズミ3種が確認され、60年以上前まで田んぼや畑だったので、先住者と呼び寄せたのでしょう。同じく先住者のトカゲ、カナヘビ、ヒキガエルも棲みついているとのこと。集合住宅では、野鳥のために餌を与えたり植栽したりする際にも、近隣との関係を考えることが重要であることを改めて感じます。



写真1 庭の全体像(取材当日撮影)



写真2 繁殖したメジロの親子(小宮会長提供)



写真3 サクラの木にやってきたコゲラ (小宮会長提供)

●鳥だけではない庭の生きもの

驚いたのは、水場が野鳥だけでなく両生類の繁殖場所にもなっていることです。バードバスでは、トウキョウサンショウウオが繁殖しており、繁殖期には水中に卵塊が見られ、多くの幼生が育つといえます。冬は落ち葉や植木鉢の下で越冬しているそうです。さらにニホンアカガエルも繁殖しているとのこと。サンショウウオやアカガエルなど、かつてこの地に依存していた生きものが今も生きる貴重な生息地といえるでしょう。

取材当日は生きものの姿をあまり見る事ができなかったため、会長が過去に室内から撮影した生きものやその行動を見せていただきました。水場を利用する野鳥の様子(写真5)やトウキョウサンショウウオとニホンアカガエル、キジバトやヒヨドリの子育て中の写真(写真6)など、「こんな写真が撮れるんだ」と思える貴重な記録が数多く残されていました。室内から観察できるため、繁殖を邪魔せずに状況を追えたり、写真が撮れたりすることは、庭で



写真5 水場を利用するキジバト (小宮会長提供)



写真4 餌台に来てしまったドブネズミ (小宮会長提供)

観察することの大きなメリットです。また、庭の中で繁殖した鳥だけでなく、周辺で巣立ったカラスやスズメ、エナガの幼鳥が立ち寄ることもあるそうです。庭が地域の中で、生きものの「受け皿」として機能していることがうかがえます。

ネズミの存在に気づいた時点で餌やりを中止したように、野鳥のためになる行為であっても、近隣住民との軋轢を避ける判断が重要になります。都市部で庭に生きものを呼ぶ際には、周辺の影響も考慮し、できる範囲で自然の循環を支えることが大切だと感じました。

●あなたの庭にも小鳥を

今回ご紹介できたのは、この庭の取り組みの一部にすぎませんが、本記事が、皆さまの庭に小鳥を呼ぶきっかけになれば幸いです。NPO 法人生態教育センターが企画する「お庭生きもの調査」が4月1日から始まります。ぜひ皆さまの庭で観察できた生きもの情報をお寄せください(詳細は本誌18ページ)。



写真6 子育て中のヒヨドリ。室内から観察するので営巣状況も鳥たちに影響を与えず観察しやすい (小宮会長提供)

ツグミにになりきって地面の餌を探してみた

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 普及啓発室 岡安栄作 文・写真

落ち葉が敷き詰められたちょっと薄暗い林の奥から、「ガサッ、ガサッ…」という、落ち葉を踏んで歩いてくるような音が聞こえてくることがあります。誰かが歩いているようにも聞こえ、思わず背筋が寒くなりますが、その正体は今回の主役「ツグミ」です(写真1)。落ち葉で見えない地面を、あたかも見えているかのように、一心不乱に嘴で激しく払いのけ、そして、その下にいるであろう餌を見つけているのです。

●人目を気にしない冬鳥

ツグミの仲間には、ツグミのほかにシロハラ、アカハラ、トラツグミなどがいます。いずれも冬になると地面に下り、土の中や落ち葉の下に潜むミミズや節足動物を探して採餌します。しかしシロハラ、アカハラ、トラツグミは、林内や藪の中など観察しにくい場所で行動するのに対し、ツグミは公園や河川敷といった見通しの良い場所でも、人目をはばからずガサガサと餌を探す傾向にあります。読者の皆さんであれば、一度はその姿を目にしたことがあるのではないのでしょうか。

ツグミは10月頃、ロシアなどの北国から日本へ渡ってきます。渡来直後は地面に下りることは少なく、見かけるのは木の梢の方が中心で、エノキやム

クノキ、ナナカマドなどの木の実を主に食べます(写真2)。しかし年末が近づき、樹上に実が少なくなると、次第に地上での採餌が増えます。ミミズや甲虫の幼虫やクモなどの小動物を中心に、地上に下りて餌を探す光景をよく目にするようになります。

●ツグミになってみよう

春が近づく都内のある都市公園で、ツグミの採餌行動を観察していました。動きが止まり、何やら引っ張り出しています。ヒモのように長いものを、ぐう〜と引っ張り出しました。「おっ、ミミズだ!」お見事、餌となるミミズをゲットしました。落ち葉の下にいたミミズを探し当てたのです。ツグミってすごい…。そこで、ツグミになりきって、落ち葉の下にミミズを探してみました。

ツグミが去った直後の場所に移動し、落ち葉の下を探ってみました。手やスコップを使ってミミズを探す…いや、違う。ツグミは嘴しか使いません。ツグミの気持ちになるには、そこまで徹底しなければ意味がないですね。

●嘴がないなら作ればいい

人間が本物の嘴を得ることはできませんが、「嘴っぽいもの」なら作れます。考案したのが、嘴型の箸



写真1 地面に下りたツグミ



写真2 樹上で木の実を食べるツグミ

です（写真3）。一見、市販品のようですが、実は筆者の手作り。割りばしの先端を木工ヤスリで嘴のように削り出し、仕上げに紙やすりで絶妙なカーブを整え、塗装を施しました。ネーミングは、「割り箸」にかけて「くちばし」。技術と根気、ユーモアを込めて作り上げたものです。

さっそく実践してみました。左右に高速で動かし、落ち葉を払いのけます。思った以上に手首に負荷がかかります。この負荷をツグミは日常的に感じているのかと思うと、不思議と心がツグミに近づいていきます。意外にも早く地面に到達し、次は湿った腐葉土質の土を掘ってみます。



写真3 自作の「くちばし」

●ミミズを見つけた瞬間

最初に現れたのはセミの死骸（写真4）。あの夏の猛暑の思い出を回想しつつ、大きな獲物かと思いましたが、ツグミはセミを食べないので、再び枯葉の奥に戻しました。次に見つけたのはダンゴムシ（写真5）。箸で丸いダンゴムシをつまむのは、もちろん初めての経験です（笑）。本命のミミズはなかなか見つかりません。落ち葉を払い続けるうちに、手首だ



写真4 最初に見つけたセミの死骸



写真5 「くちばし」で見つけたダンゴムシ

けでなく腰や膝にもじわじわと疲れがたまってきました。ツグミではない人間の体には、なかなかこたえる動作です。疲労がピークに達したその時、土の中から鈍く動くものが見えました。ミミズです！丁寧に引っ張り出し、ついにゲット！（写真6）本来ならばおいしくいただくところですが、もちろんここで終了です。



写真6 ついに見つけたミミズ

●ツグミの気持ちに近づいた日

くちばしを使ってツグミになりきってみると、採餌がいかに大変かを実感しました。ミミズを見つけた瞬間の感動は、もしかするとツグミも同じ気持ちを味わっているのかもしれませんが。人と鳥が、同じ行動を通して同じ感情に近づいた——そんな異次元で貴重な体験でした。さて、次はキツツキになってみようかな。

分布が変化している日本の鳥

バードリサーチ 研究員 植村慎吾 文・写真

鳥の分布は不変ではなく、徐々に変化していきま
す。全国鳥類繁殖分布調査や全国鳥類越冬分布調査、
モニタリングサイト 1000 などのモニタリング調査、
それからバードノートに寄せられた記録や様々な調
査研究から、日本の鳥の分布変化が見えてきていま
す。気候変動による変化や人為的な環境の改変によ
る個別の種の分布変化もあれば、競合する他種の変
化が影響したと考えられる変化、さらに、変化して
いるものの原因はよくわからないものなど、いろい
ろな事例があります。今回はそれらのうちいくつか
の種についてピックアップしてご紹介します。

●国内で繁殖しはじめたジョウビタキ

ジョウビタキといえば、身近な冬鳥の代表といえ
る鳥です（写真 1）。一方で、以前から国内で繁殖し
た例も知られてきました。初めて繁殖が確認された
のは 1983 年の北海道土士幌町でした。その後しば
らく繁殖例はありませんでしたが、2010 年代ごろか
ら中国山地や岐阜県、長野県、山形県、北海道など
の山地で繁殖記録が相次ぎ、近年ではすっかり繁殖
するものが定着しています。繁殖するのは主に標高
900m 以上の場所です。私も昨年、軽井沢で繁殖期
にジョウビタキを観察しました。オスもメスも餌運
びをしていて、見慣れない季節と場所での観察にし
ばし没頭しました。元々の繁殖地は中国北東部やロ
シア沿海州、樺太にかけてで、そちらでは樹洞や倒
木の下、岩棚、人家や倉庫の隙間などで繁殖します。
国内での繁殖は人家の隙間や換気扇フード、室外機
の上など、人の活動との関わりが強い場所での営巣
記録がほとんどです。特に、別荘やペンションでの
繁殖が多いようです。より

北の国で繁殖していたジョ
ウビタキが、どのようにし
て国内に定着したのかはま
だよくわかっていません。

国外の繁殖地では、カッ
コウがジョウビタキに托卵
することがあるそうです。



人家の近くにある巣にはあまり托卵しませんが、人
家から離れた場所にある樹洞などの巣には托卵する
割合が比較的高いとのこと。ジョウビタキは薄い桃
色の卵を産むメスと、薄い青色の卵を産むメスが
いるそうですが、カッコウは青っぽい卵を産むもの
が多く、ジョウビタキの薄い青色の卵の方の巣に托
卵することが多いそうです。国内ではカッコウによ
るジョウビタキへの托卵はまだ確認されていません
が、近い将来に報告されることがあるかもしれません。

それから、国内のジョウビタキの繁殖地では研究
者らが個体識別のために色足環を装着している例も
ありますが、これまでのところ彼らの越冬地はわか
っていないようです。皆さんの近くにいるかもしれ
ませんので気にしてみてください。

●シロハラの越冬分布が北上している

中国北東部や朝鮮半島北部、ロシア沿海州で繁殖
し、冬鳥として主に南東北以南の平地や山地の林、
農耕地などで越冬するシロハラ（写真 2）。地面で採
餌することが多い鳥ですので、積雪の多い場所では
基本的に越冬しません。しかし、全国鳥類越冬分布
調査では、これまで分布していなかった日本海側や
北日本といった雪の多い地域に越冬分布が広がっ
てきていることがわかりました。気候変動によって積
雪量や地面が凍ることが少なくなった結果、これま
で越冬できなかった場所でも越冬できるようになっ
た可能性があります。

越冬分布が北に広がったことに呼応するように、
南の方では越冬個体数が減少してきています。シロ
ハラは南西諸島でも越冬するものが多いです。し



写真 2 シロハラ

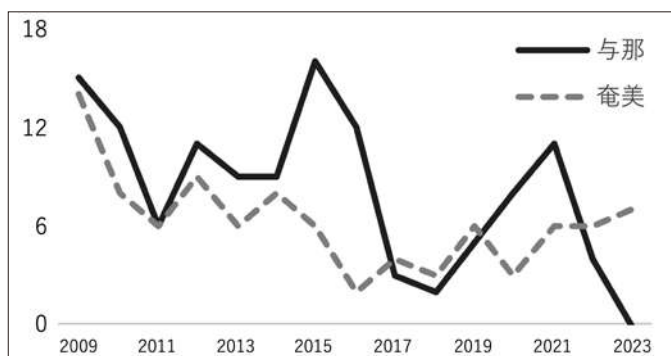


図1 モニタリングサイト1000調査によるシロハラの個体数の経年変化 (出典: モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報 2024年9月号 Vol. 16 No. 1)

しかし環境省のモニタリングサイト1000 陸生鳥類調査では、奄美大島と沖縄島の両サイトで越冬期の記録個体数がどんどん減ってきていることが明らかになってきました(図1)。特に沖縄島の与那サイトでは、2009年の調査開始以来、増減はありつつも毎年記録がありましたが、2023年度の越冬期調査では初めて記録がありませんでした。奄美サイトでも、調査開始当初の2009年と比べると個体数が少ない状況が続いています。シロハラはイリオモテヤマネコにとっては冬の間の重要な餌資源でもあるなど、南西諸島に固有の生態系に与える影響が大きいのではないかと懸念しています。

●リュウキュウサンショウクイの分布拡大

1970年代、リュウキュウサンショウクイは南九州以南に留鳥として生息していました(写真3)。それが徐々に北の方へ分布を広げ、2010年代には九州全域、四国、紀伊半島でも確認されるようになりました。さらに近年は、関西地方や首都圏でもリュウキュウサンショウクイの個体数が増えてきています。近縁種のサンショウクイは夏鳥で、より北の地域で繁殖します。サンショウクイはかつて関東平野でも広く繁殖していて、東京都心などでも繁殖するものが見られたそうです。しかし1980年代に分布や個



写真3 リュウキュウサンショウクイ (撮影者: 湯浅芳彦)

体数が減少し、現在では関東平野ではあまり繁殖しなくなりました。1980年代は他にもアカショウビン、サンコウチョウ、アオバズクなど多くの夏鳥が減少したことが知られていて、これは越冬地での森林伐採の影響が大きかったのではないかと考えられています。リュウキュウサンショウクイは、サンショウクイが減少した場所に侵入するようにして分布を広げたのではないかと考えられます。実際に関東平野や瀬戸内地域では、山際の標高が高くない場所にリュウキュウサンショウクイが分布するようになってきています。バードリサーチでは過去の記録も含めて、リュウキュウサンショウクイおよびサンショウクイの記録を収集しています。記録をお持ちの方はぜひ登録いただけますとありがたいです。こちらのウェブページ内(QRコード)で紹介しているとおり、両種は鳴き声で識別することもできます。

【サンショウクイプロジェクト (QRコード)】



Profile

植村 慎吾 (うえむら・しんご)。1992年 山口県出身。バードリサーチ研究員。モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査や食性データベースなどを担当しています。鳥類学は伝統的にバードウォッチャーの貢献が大きい分野です。鳥に興味を持つ皆さんと一緒に調査研究をすすめていきたいと思っています。著書に『野鳥の食事事典』(山と溪谷社)など。

引用・参考文献

- ・ Higuchi, H., & Morishita, E. (1999). Population declines of tropical migratory birds in Japan.
- ・ 川辺百樹 (1994) 糠平温泉での繁殖記録. 日本野鳥の会 野鳥 (575): 11.
- ・ 三上かつら, & 植田睦之. (2011). 西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大. *Bird Research*, 7, A33-A44.
- ・ 三上かつら, & 植田睦之. (2016). 日本のサンショウクイ 2 亜種の音声の違いと簡便な判別法. *Bird Research*, 12, T1-T8.
- ・ モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報 2024年9月号 Vol. 16 No. 1
- ・ 笹野聡美, 山田勝, & 江田伸司. (2015). 岡山県におけるジョウビタキの繁殖. *日本鳥学会誌*, 64(1), 91-94.
- ・ 植田睦之, 植村慎吾, 葉山政治, 荒哲平, 高川晋一, 川路則友, ... & 内山優奈. (2021). 全国鳥類繁殖分布調査で収集された20kmメッシュの鳥類の繁殖分布のデータ. *Bird Research*, 17, R5-R9.
- ・ 植田睦之, 奴賀俊光, 山崎優佑, & 葉山政治. (2023). 全国鳥類越冬分布調査で収集された40kmメッシュの鳥類の分布データ.
- ・ 山路公紀, & 林正敏. (2018). ハケ岳とその周辺におけるジョウビタキの繁殖状況と環境の特徴. *Bird Research*, 14, A23-A31.
- ・ Zhang, J., Santema, P., Li, J., Deng, W., & Kempenaers, B. (2023). Brood parasitism risk drives birds to breed near humans. *Current Biology*, 33(6), 1125-1129.



登場人物

羽根田 翔：探偵業をしているがなぜか羽根について異常に詳しく周囲からは羽根探偵と呼ばれている。基本的に人見知りで不愛想だが羽根を見ると食いついてくる。

鳥居 明子：自然や生き物が好きな高校生。好奇心旺盛で明るい性格。

木ノ下 智美：明子の親友でクラスメイト。怖がりなのにホラー好き。

智美にはずっと気になっている羽根があった。しかしそれが一体何の種類でどういった意味を持っているのか自分では調べる術もなく引き出しの中にしまい込んでいたが、最近親友の明子が羽根に興味を持つようになったのでその羽根について相談してみることに…。

智美：「ねえ、明子って最近羽根に興味があるじゃない。しかもすごく羽根に詳しい人に弟子入りしたって言ってたでしょ！ ほら、この前雑木林で会った人（※ エピソード 4）。あの人が師匠^{ししょう}なんだよね？ えーっと、羽根田さんて言ったっけ。ちょっと調べてもらいたい羽根があるんだけど、あの人に見てもらえないかなあ？」

明子：「えっ、まあ師匠ではあるんだけど…（羽根田さんには事務所に来なくなって言われてるから最近行ってないんだよなあ）。ちなみにどんな羽根なの？」

智美：「実はね、2年前に私のおばあちゃんが亡くなったんだけど、亡くなる少し前にお見舞いに行った時、この羽根をくれたの。」

そう言うと智美はお守り袋のような物から羽根を取り出して明子に見せた（写真 1）。

智美：「おばあちゃんがね、この羽根はお守りなんだって言ってたの。すごく大切にしていた物だから私にあげるんだって。」

見せてもらった羽根はなんとなくどこかで見たことがあるように感じたが、明子はどうも思い出せない。

明子：「…何の羽根だろうねえ？」

智美：「何の変哲もない感じの羽根でしょう。でもおばあちゃん^{ほうおう}は鳳凰の羽根だなんて言ってたんだよ。そんな架空の生き物な訳ないし流石におかしいよね。…あっ、もしかしたら怪しい宗教にだまされてたんじゃないかな！ 壺を高く買わされたりとかあるでしょ！？ この羽根も高値で買わされたのかも！」

明子：「えー、羽根を高値で買わされたなんて聞いたことないよ。」

智美：「もしかしたらこれを持ってるのがばれたら私のところにも宗教^{かんゆう}の勧誘^{かんゆう}がくるかもしれない、どうしよう！！」

明子：「いや、ちょっと落ち着きなよ、何わけの分からないこと言ってるの。智美は変なホラーサイトの見過ぎなんだって。まあとにかく何の羽根か自分たちでも調べてみようよ。」

二人は学校の図書室へ行き、図鑑が並んでいる棚から 1 冊の羽根図鑑を発見した。図書室の机で顔を寄せ合いながら 1 冊の羽根図鑑を 1 ページずつめくって例の羽根と絵合わせをしていく。最初に気になったのはキジ雌とヤマドリ雄の羽根だった。軸の中心に濃い色が入っていて雰囲気は似ているが、これが同じ種類の羽根とは言い難い。続いて気になったのはカモ類の羽根だった。先端が尖っているフォルムが似てはいるが、どのカモもピタリと同じ



写真 1 智美が持っていた羽根

模様のは見つけれなかった。

智美：「やっぱり何の羽根か分からないね……。私の両親って共働きだから小学生の頃は学校が終わったらおばあちゃんの家へ毎日のように行っていたの。そんなんだから私はおばあちゃん子だったし、おばあちゃんも私のことすごく可愛がってくれたんだよね。だから本当に大切なものを私にくれたんだと思うけど、なんでこの羽根を大切にしていたのか分からないと気持ちがすっきりしないよ。」

明子：「理由は聞かなかったの？」

智美：「うん、急に具合が悪くなったからこの羽根をもらった時にはもうあんまり話ができなかったの。」

当時のことを思い出したのか、智美は急にボロボロと泣き出してしまった。

明子：「だ、大丈夫だよ智美！ 師匠のところに行って聞いてみよう！ きっと理由が分かるよ。」

羽根田に追い返されるかもしれないと思いつつも親友の涙に背中を押され明子は智美を羽根田の事務所に連れていくことにした。

明子：「羽根田さん、いますかあ。」

重い扉を開くといつもの様に奥のデスクに座ってパソコンのモニターを眺めている^{なが} 仏頂面^{ぶつちようづら}の羽根田の顔が目に入った。

羽根田：「また来たのか君は。私は暇じゃないと言ってるだろう、帰りなさい！」

やはり追い返されると思った明子はどうにか説明しようとした瞬間、智美の方が先に喋り出した。

智美：「羽根田さん、助けてください！ おばあちゃんがだまされてたかもしなくて、それで、それで、大事な羽根をもらったんだけど理由が分からなくて…どうしよう！」

智美はまたもやボロボロと泣きながら支離滅裂^{しりめつれつ}な説明をはじめた。状況が読めない羽根田だったが不覚にも涙に動揺^{どうよう}してしまい、コーヒ^いーでも淹れてやるから落ち着きなさいと反射的に言ってしまった。二人を応接間のソファに座らせコーヒ^いーを淹れながらうかつだったと羽根田は思ったがもう今更追い返すこともできず、コーヒ^いーを出す^{しやべ}と明子の説明を聞き例の羽根を確認した。

羽根田：「…なるほど。じゃあキジ、ヤマドリ、カモ類とどこが違うか説明しようか。」

そう言う^{とくさく}と別の部屋から羽根を持ってきて応接間のテーブルに並べた。こうなってしまったからにはさっさと説明して帰らせるのが得策^{とくさく}だろうと考えた羽根田は早口に説明を始めた。

羽根田：「まずこれがキジの雄と雌の腰の辺り（写真2、3）とヤマドリ雄の胸の辺りの羽根だ（写真4）。例の羽根もキジ目、つまりキジの仲間の羽根だから雰囲気は似ているというのは理解できる。しかし形状が明らかに違う。先端が尖っていないのが見てすぐ分かるだろう。」

明子：「確かにそうですね、茶色の感じは似ているけどキジもヤマドリも形が違いますね。」

羽根田：「次はカモの羽根（写真5）。左からオナガガモ、写真4 ヤマドリ雄の胸の羽根



写真2 キジ雄の腰の羽根



写真3 キジ雌の腰の羽根



写真4 ヤマドリ雄の胸の羽根

シマアジ、オカヨシガモ、ヨシガモの雄の肩羽だ(写真5)。先端が尖っている形状は似ているが決定的に違う部分があるんだが、君たちには分からないのか。」

明子：「模様が違うのは分かりますけど…。」

明子たちの観察力の無さにイライラが募り、羽根田の語気が荒くなる。

羽根田：「根本的にもっと違うところがあるだろう！ 例の羽根の縁を見てください。キラキラしているだろう。それがこの羽根の最大の特徴なんだ！」

智美：「よ〜く見ると他の羽根とは違って輝いて見えますね(写真6)。」

明子：「言われてみれば気づくけど、いろんな角度から光を当ててみないと正直よく分からない微妙な違いですね。」

羽根田：「君らの観察力の無さには呆れるな。こんなのはいちもくりようぜん(あき)は一目瞭然だろう、他の鳥とは明らかに違う。これはニワトリの首周りの羽根だ！」

明子：「二、ニワトリ!？」

羽根田：「ああ、羽根のはたきなんかにも使われているから君らも一度は目にしてるだろう。」

明子は自分の家の物置に置いてある羽根はたきを思い浮かべた。どうりで見覚えがあるはずだ。

智美：「じゃあ、やっぱりおばあちゃんはだまされていたんですね。」

智美の瞳にはまた涙があふれそうになっていた。

羽根田：「いや、そうとは限らないだろ。ネイティブアメリカンはドリムキャッチャーという羽根を用いた装飾品をお守りにしているし、羽根をお守りにすること自体不思議ではない。」

智美：「でも、それは装飾品だからですよ。ニワトリの羽根をそのままお守りにするってそんなこと…」

羽根田：「君のおばあさんがどういった経緯でこの羽根を大切にしていたのか正直私にはどうでもいいことだ。他人が何を信仰しようが知ったことではない。大仏の石像だって私にとってはただの石の塊でしかない。ただそれを信じている人にとっては有難いものなんだろう。信仰とはそういうものだ。おばあさんがその羽根を大切にしていたそれを君に託したんだから、その事実だけで充分じゃないか。違うか？」

明子：「ちょっと、そんな言い方しなくても！」

羽根田：「まあニワトリは朝を告げ闇夜の邪気を払う霊鳥として古くから崇められていたという記録があるし、君らは知らないだろうが有難い鳥とされてきたんだ。それに鳳凰(くちばし)の嘴はニワトリを模しているから、おばあさんがそう言っていたのもあながち間違いじゃないだろう。さあ、もうそろそろ帰ってくれ。」

明子と智美は事務所を追い出され、とぼとぼと二人で家路に着いた。智美の顔はさっきより少しだけ晴れやかになり、明子はほっと胸を撫で下ろした。

to be continued



写真5 左からオナガガモ、シマアジ、オカヨシガモ、ヨシガモ雄の肩羽



写真6 智美が持っていた羽根に光をあてると…

参考・引用文献

○福岡市博物館『企画展示 No.484 鳥・酉・鶏』

URL : <https://museum.city.fukuoka.jp/archives/leaflet/484/index.html>

○奈良国立博物館『正倉院展用語説明』

URL : <https://shosointen-glossary.narahaku.go.jp/ho-o/>

○藤井 幹『羽根識別マニュアル増補改訂版』文一総合出版

第1回 子ども鳥博士 in 小田原 開催報告

2月9日、第1回「子ども鳥博士」を開催しました。子ども鳥博士は2000年まで23回にわたり実施されていましたが、その後開催が途絶え、約26年ぶりの再開となります。回数や内容を刷新した今回は、神奈川県小田原市の小田原城址公園周辺を会場に行いました。

観察会（午前）

午前中は野鳥観察を実施しました。9時に小田原駅に集合し、公園広場へ移動。移動中にイソヒヨドリ、ハシブト&ハシボソガラス、ムクドリなどが次々と見られ、子どもたちは興味津々。雪が舞う曇りの天気でしたが本格的な開始前から熱量は高いです！公園広場に到着後、スタッフの自己紹介と今日の流れの説明中に、アカハラ（亜種オオアカハラ）が出現。芝生と立木の間で見え隠れしていることを大人よりも確実にとらえる子どもたちにスタッフも感心してしまいます。

お堀へ移動し、巣作りをしているアオサギや、潜水をするカイツブリなどを観察しました。中には遠くからでも種名を言い当て、体色の細かな違いを専門用語を交えて説明したり、持っている装備が大人顔負けだったり、すでに“博士級”の知識を持つ子たちがいることに気付きました。もちろん、最近鳥に興味を持ち始めた子も参加しているので、スタッフはそれぞれの知識に合わせて、鳥の名前や行動について丁寧に解説しました。



写真1 野鳥を観察する様子と参加した子どもが撮影したアオサギ

野鳥に関するレクチャー（午後）

おだわら市民交流センター UMECO の会議室に移動し、昼食の後は野鳥に関するレクチャーを行いました。まずは午前中に見られた、ヒドリガモやカイツブリなどの水鳥、シロハラやシメといった冬鳥を含む計31種を確認しました。子どもたちは見られた種を観察した状況について確実に答えていきます。午前中の姿を見

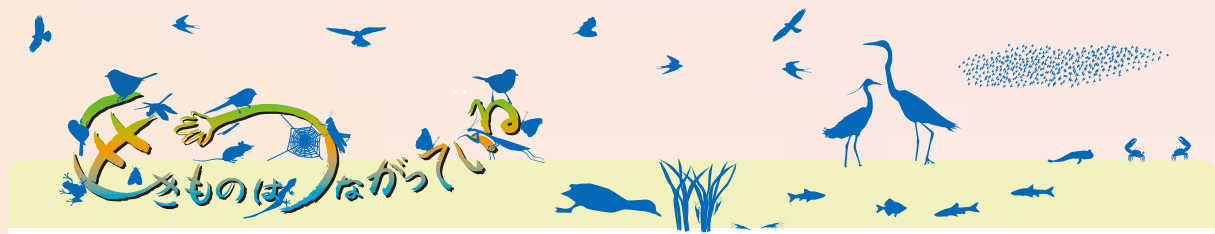
ているので、もう驚きません。続いて、鳥クイズを実施しました。学年や観察力を考慮して2グループを編成し、協力して答えをまとめ、発表してもらいました。どちらのグループも積極的に意見を出し合い、知識だけでなくグループワークの姿勢も大人顔負けです。さらに「なぜそうなのか」「他の鳥にも同じ特徴があるのか」といった逆質問も飛び出し、出題する側も考えさせられる場面がありました。



写真2 午後はクイズを楽しんだり、鳥のことについていろいろ学んだりしました

今回は単なる観察会にとどまらず、鳥の形態や生態、そして鳥を取り巻く環境の問題について考える機会としました。再開1回目となる今回、20年前とは自然環境・社会環境ともに大きく変化しています。今後回を重ねていくことで、野生生物の保護や保全を担う次世代の育成につながることを期待しています。

第2回子ども鳥博士開催決定！詳しくは連盟だより（23ページ）をご覧ください。



イソヒヨドリ

長岡市立科学博物館 学芸員 鳥居憲親 文・写真

●イソヒヨドリはちょっと変わり者？

イソヒヨドリは名前に「ヒヨドリ」とついていますが、ヒヨドリではなくヒタキの仲間です。日本で見られるヒタキ科の鳥の多くは、山林や草地に生息しています。そんな中、イソヒヨドリは岩礁でくらす、ちょっと変わった鳥です。巣場所も独特で、他のヒタキ科の鳥たちが木の上や草の茂み、土のくぼみ等に巣をつくるのに対し、岩の割れ目やくぼみに営巣します。また、イソヒヨドリは雌雄で体の色が大きく違います（写真1）。オスは頭や背中が海色でお腹から尾羽の付け根にかけてはレンガ色をしています。メスは全身が岩肌の様な地味な色をしています。

●なわばりをもち、単独でくらす

イソヒヨドリは留鳥で、大きな渡りはしません（ただし、北海道では夏鳥）。オスもメスもそれぞれ岩

場になわばりを構えて、そこで1羽でくらしています。しかし、このままなわばり内で単独でくっていると、オスとメスが出会うことができません。そのため繁殖期になると、メスがなわばりからいったん出て、気に入ったオスのもとに嫁入りします。繁殖が終わると、メスはオスのなわばりを出て再び単独生活に戻ると言われていますが、元のなわばりに戻るのか？ 全然違う場所に新たになわばりを構えるのか？ 詳しいことはよくわかっていません。

オスのなわばり争いは激しく、最初はさえずり合いをしますが、相手が引かないと、次は胸をはって大きな声で鳴きながら羽ばたいたり、頭を低くして翼を持ち上げた姿勢で相手に走り寄ったりします。それでも決着がつかない場合、飛び上がって蹴り合いが始まります。時には、空中でお互いに脚をつかみ合い、そのまま海に落ちていくこともあります。

●海岸での餌生物

雑食性のイソヒヨドリはいろいろな生物を食べています。海岸では、ヨコエビ、カニ、フナムシ、巻貝、昆虫、魚、海藻や果実等を食べます。

フナムシというのも他の鳥ではあまり耳にしないメニューです。そのせいか、「イソヒヨドリはフナムシが大好きでよく食べる」といった解説文をときどき見かけます。しかし実際に調べてみると、それほどフナムシは食べてはいませんでした。私が調べた海岸にはたまたまフナムシがあまりいなかった、観察した個体はフナムシがあまり好きじゃなかった



写真1 イソヒヨドリ（左：オス、右：メス）



写真2 フナムシを捕食するオス

等々、検討すべき可能性もまだいくつか残っていますが、逃げ足が速く捕まえるのが難しいフナムシは、実はそんなに頻りに食べてはいないのかもしれませんが。イソヒヨドリにとってフナムシがどれくらい魅力的な食べ物なのか？ は、まだ誰にも本当の答えはわかりません。

●都市にも進出

海岸でくらす鳥とされてきたイソヒヨドリですが、近頃あちこちの都市でも発見されるようになりました。都市でよく見かける鳥は、スズメ、ムクドリ、ハシブトカラス等、地味な色の鳥が多いので、青いイソヒヨドリが都市を羽ばたく姿は多くの人の注目を集めました（写真3）。

都市にはもちろん大きな岩は転がっていません。そのためイソヒヨドリは、建物の隙間、換気フード、ビルの鉄骨のすきま等で営巣しています（写真4）。都市にはヨコエビやフナムシはいませんが、代わりにミミズやムカデ、トカゲ、クモ等をよく食べています。海岸と都市の餌メニューを比較してみると、



写真3 都市でなわばり争いをするオス



写真4 室外機の下で子育てするオス

どちらも地面にいる小動物が中心であることがわかっていきます。イソヒヨドリはもともと食性の幅が広がったため、都市に進出しても食べ物にはあまり困らなかったと考えられます。

●都市でくらし始めたことで…

新しい場所でくらし始めたということは、そこでもともとくらしている生きものたちのつながりの輪の中に入り混んでいくということです。イソヒヨドリという新しいメンバーが加わることで、その都市にもともとあった生きものたちのネットワークにも変化が起こります。例えば、ミミズやトカゲ等にとっては新たな捕食者が増えたことになります。イソヒヨドリも海岸ではあまり出会わなかった飼育ネコやチョウゲンボウといった捕食者に襲われるようになりました。さらに、車との交通事故や人による追い払い等、新しい危険にも遭遇しています。

こうした他の生物との関係の中で、イソヒヨドリたちの分布はこれからどう変わっていくのでしょうか。国内のイソヒヨドリの都市への進出状況は「全国鳥類繁殖分布調査報告（日本語版最終報告）」で見ることができます。インターネットで誰でも無料で読めるので、気になった方はぜひ検索してみてください。

全国鳥類繁殖分布調査報告（QRコード）



プロフィール

鳥居憲親（とりい・のりちか）。兵庫県出身、長岡市立科学博物館学芸員。まだ誰も知らない鳥たちの生態が知りたくて、イソヒヨドリの生態や林床にひっそりと実る液果をどんな鳥が食べにきているのか等を調べています。



ニホンカナヘビ

京都大学大学院 理学研究科 動物行動学研究室 久保軍馬 文・写真

●ニホンカナヘビってどんな生きもの？

ニホンカナヘビは日本固有の小型のトカゲです。名前に「ヘビ」とついていますが、ヘビではなく、れっきとしたトカゲの仲間です。南はトカラ列島、北は北海道まで分布し、日本各地の草地や農耕地、川岸、公園、庭先などさまざまな環境で見られます。学名は *Takydromus tachydromoides* といい、「速く走るもの」という意味です。その名の通り、草むらを素早く走り回る姿がよく見られます。日本にはほかにもカナヘビの仲間が分布しており、西表島や石垣島にはサキシマカナヘビが、宮古島にはミヤコカナヘビが、沖縄諸島や奄美諸島などにはアオカナヘビが、対馬にはアムールカナヘビが、北海道の北部にはコモチカナヘビが生息しています。

体長（頭の先から尻尾の付け根まで）は約6 cm ほどで、体長の3倍近くにもなる長い尻尾が大きな特徴です（写真1）。体色は子どもでは全体的に褐色で、大人になると個体によってはお腹の横側に黒褐色の2本の帯とその間を通る白い帯が現れます。よくニホントカゲ（またはヒガシニホントカゲ）と間違えられることがあるのですが、彼らの滑らかなで光沢のある鱗とは対照的に、ややザラザラとした

鱗をもち落ち着いた色合いです（写真2）。

ニホンカナヘビは繁殖について良く調べられています。4月から8月にかけて交尾することが知られています。オスがメスの腹部に噛みついて抑えつけたのちに、尾を絡めさせるように交尾します。このとき、メスの体にオスの噛み跡が残ることがあります。また、一年で2から4回ほど産卵し、一度の産卵で1個から7個ほど産むことが知られています。

●ニホンカナヘビの「食う・食われる」の関係

ニホンカナヘビの餌についてですが、主に小さな節足動物を食べます。昆虫やクモを多く食べており、そのほかにもムカデやヤスデ、ワラジムシ、カタツムリなどを食べます。特定の獲物にこだわるというよりは、その時々で手に入りやすい獲物を幅広く利用する捕食者です。

一方で、ニホンカナヘビ自身もさまざまな天敵に捕食されます。ヘビはニホンカナヘビの捕食者としてよく知られており、シマヘビやアオダイショウ、マムシ、シロマダラといったヘビがニホンカナヘビを食べています。また、鳥類もニホンカナヘビの重要な天敵です。イソヒヨドリやアカショウビン、チュウ

ウサギ、サシバなどさまざまな鳥がニホンカナヘビを食べることが知られています。特にモズはニホンカナヘビを枝などの突起物に串刺しにし、のちの食料として貯蔵する「はやにえ」にすることが



写真1 ニホンカナヘビ成体



写真2 ニホンカナヘビ（左）とニホントカゲ（右）

多く観察されています。そのほかにも、イタチやハクビシンなどの哺乳類、トノサマガエルやヌマガエルなどの両生類、同じ爬虫類のヒガシニホントカゲ、さらにはアシダカグモやジョロウ



写真3 シダ科の葉の上のニホンカナヘビ



写真4 日光浴をするニホンカナヘビ

グモなどの節足動物にも食べられます。このように、ニホンカナヘビはさまざまな動物を食べ、さまざまな動物に食べられる「中間的な捕食者」です。食物連鎖の中で、エネルギーを上下に橋渡しする重要な役割を担っている、というわけです。

●生き抜くための巧みな術

さまざまな天敵に狙われるニホンカナヘビですが、もちろん黙って食べられているわけではありません。巧みな生き抜く戦略があります。

まずはその特徴的な長い尻尾についてです。ニホンカナヘビの尻尾は、強い刺激が加わると自ら切り離すことができ、さらに元の尻尾は部分的に再生します。切れた尻尾はしばらくピクピクと動き、天敵の注意をそらしている間に本体は逃げることで済みます。また、ときどきこの尻尾を小刻みに震わせることがあります。この行動はヘビなどの捕食者の攻撃を尻尾に集め、逃げ延びる確率を高める行動であることと考えられています。

また、ニホンカナヘビはときどき「腕振り」と呼ばれる、前あしを円を描くように回転させる行動をします。この行動はいろいろな機能があると考えられていますが、その中の一つにあらかじめ「自分は逃げるのが早いから、襲っても無駄である」と伝えることで、捕食者の攻撃を諦めさせる効果があるとされています。

●ニホンカナヘビの魅力

ニホンカナヘビの魅力は、身近な草むらで観察できるのに、行動が多彩で見ていて飽きない点でしょう。じっと観察していると、餌を探し求めてか地表

を歩きまわったり、草本植物をそろそろと登っていき、葉っぱの上でちょろちょろしていたりします(写真3)。天気の良い日には日当たりの良いところで気持ちよさそうに日光浴する姿が見られます(写真4)。「餌はないかな」、「体を温めたいな」と考えているようで、ニホンカナヘビの気持ちが分かったような気分になれます。

また、密度が高い場所では2匹どうしのやりとりもよく観察できます。一緒になって同じ場所で日光浴していると思ったら、片方が猛烈な勢いで追いかけて、もう片方が全速力で逃げるなんていうケンカも見られたりします。また、別のニホンカナヘビに対して腕振りを行い、コミュニケーションをとる様子も観察できます。ニホンカナヘビにも複雑な人間関係ならぬ「カナヘビ関係」があるのだと実感させてくれます。

余談ですが、現在私と同じ研究室の方々が、インターネット上で「日本産トカゲ類捕食者プロジェクト」を行っています。ニホンカナヘビを含め、日本のトカゲがどのような動物に食べられているかを調べることを目的に、トカゲが食べられている写真を募集しています。トカゲが他の動物に食べられている写真をお持ちの方は、ぜひそちらのホームページに投稿してみてください。

【日本産トカゲ類捕食者プロジェクト
(QRコード)】



プロフィール

久保軍馬(くぼ・ぐんま)。大阪府生まれ。京都大学大学院理学研究科修士課程在籍。小さいころから爬虫類が大好きで、気づけば大学で爬虫類を研究する道に進んでいました。現在はニホンカナヘビの生態や進化について調べています。

ネイチャーポジティブと自然共生サイトと地域づくり

環境省 自然環境局自然環境計画課 地域ネイチャーポジティブ推進室 室長 奥田青州 文

●生物多様性とネイチャーポジティブとは

生物多様性とは、すべての生きものの間にある「違い」のことです。その「違い」があることで、様々な自然の恵みが生み出されるとともに、様々な機能・強み・つながりが生まれます。これにより「変化」が生じた際にも、自然の恵みを生み出す適応力・安定力・しなやかさを持つ生態系が維持されてきました。しかしながら、人間活動により世界的に生物多様性は劣化を続けています。

2022年12月にカナダで開催された生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）では、新たな世界目標として「昆明・モントリオール生物多様性枠組（GBF）」が採択され、2030年ミッションとして「自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる」いわゆる「ネイチャーポジティブ」が掲げられました。これは、従来の自然保護だけではなく、気候変動対策や資源循環等の様々な分野の施策と連携して、社会・経済全体が生物多様性の保全に貢献するよう変革させていく考え方です。

●30by30 目標と OECM

そのネイチャーポジティブ実現の鍵となる目標の一つが、GBFの23ある個別目標の一つである



図1 森林、里地里山、都市の創出緑地、ピオトープ、沿岸等様々な自然共生サイトの例

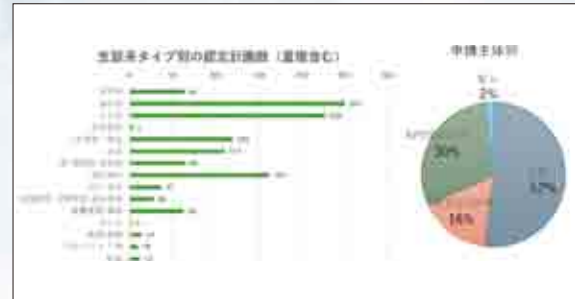


図2 これまでに認定された自然共生サイトの生態系タイプ別と申請主体別の認定数・割合

「30by30 目標」です。これは、2030年までに、陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標です。日本では、2025年8月時点で、陸地の約21.0%、海洋の約13.3%が国立公園等の「保護地域」又は「保護地域以外で生物多様性の保全に資する地域（OECM：Other Effective area-based Conservation Measures）」となっています。OECMとは、自然保護を目的とせずとも結果として生物多様性が保全されている場所を世界目標の達成に貢献する場としてカウントできる仕組みです。日本は古くから自然の恵みを生かした生活が営まれてきた結果、国土の約4割を里地里山が占めており、豊かな生物多様性を育む場となっています。例えば、現在、野生復帰の取り組みが進められ、徐々に生息数を増



図3 自然共生サイトに認定されることで得られる効果

やしているトキやコウノトリも里山を代表する生物です。こうした里地里山といった場所を OECM として保全していく動きが活発化しています。

また、認定された自然共生サイトは半数以上が民間企業による申請であり、ビジネス界を中心に高い関心が寄せられています。これは、企業の事業継続性を自然との関係性の観点から判断するために現在進められている TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）の流れも踏まえ、企業が生物多様性保全に積極的に取り組むことが企業価値の向上にも有効であると考えられていることも一因でしょう。

●自然共生サイトと地域生物多様性増進法

日本では、民間の取り組み等によって生物多様性の保全が図られている区域について、環境大臣が「自然共生サイト」として認定する制度を 2023 年度に開始しました。この対象には、例えば、企業の水源の森やバードサンクチュアリ、里地里山、農地、都市の緑地、藻場・干潟など様々な環境が含まれています。さらに、自然共生サイト認定制度を法制化した「地域生物多様性増進法」が 2025 年 4 月に施行され、9 月には法に基づく第一回の認定が行われました。これまでに 485 か所、10.5 万 ha が自然共生サイトに認定されており、保護地域と重複する場所を除いた場所は OECM として国際データベースに登録されます。

認定された自然共生サイトを生態系タイプに分類すると、最も多いのが里山林、次いで人工林、創出緑地、水田、二次草原・草地となっています（図 1）。これらの場所の多くは、規制を伴う保護地域にはしづかったものの、自然共生サイトにより OECM として認定できるようになったものであり、自然共生サイトは、身近な自然を含めた多種多様な場の保全を進めることができる画期的な制度であると言えるでしょう。

●企業や自治体に期待する取り組みや今後の展望

自然共生サイトの認定や認定後の活動を更に後押しするために、環境省では、生物多様性保全推進支

援事業（交付金）による支援や、自然共生サイトの認定者以外の者が自然共生サイトでの活動を支援した際にその支援内容にロジックモデルを用いて証明する「支援証明書」制度、自然共生サイト管理者と支援を行いたい者をつなげるためのマッチング等、様々な支援策を実施しています。2023 年に 116 の企業・自治体・団体等の方々とともに発足した 30by30 アライアンスも現在 1194 まで増えました（2026 年 2 月 5 日現在）（図 2）。

地域に根差した活動が継続・拡大していくためには、企業の更なる参画を期待しますが、そのためには、地域課題を洗い出し、その解決に向けた地域目標を明示していくことがカギになると考えています。地域目標の達成に向けた企業の貢献が明確に示せるようになることで、地域から感謝され、そのような中で構築される地域との良好な関係は企業の事業継続性にも好影響を与えられと考えられます（図 3）。

このため、生物多様性保全上重要な地域を地図上で一元的に可視化した「生物多様性の見える化マップ」を整備し、2025 年 9 月より本格運用を開始しています。本マップでは保護地域や重要な地域が幅広く示されるとともに、自然共生サイトの位置も全て確認することができます。加えて、都道府県や市町村毎の 30by30 の達成状況や、「生物多様性地域戦略」の策定状況や策定済みの計画を確認できるようになりました。これらの様々な情報を踏まえながら地域目標の検討が進められることを期待しています。

環境省としては、ネイチャーポジティブの実現に向けて、多様な主体と連携しながら地域の価値と企業の価値を同時に高めるための取り組みをしっかりと進めていきたいと考えています。

【生物多様性見える化マップ（QR コード）】



プロフィール

奥田青州（おくだ・せいしゅう）。三重県紀北町出身。2005 年環境省入省。釧路、屋久島、復興庁、生物多様性条約事務局、外務省、希少種保全推進室、生物多様性戦略推進室、観光庁、野生生物課等を経て 2025 年 7 月より地域ネイチャーポジティブ推進室長。

登録者のバードピア紹介

小河原孝生様宅バードピア

今回は、東京都都心部にお住まいの小河原孝生さん宅のバードピアをご紹介します。小河原さんは、(株)生態計画研究所の代表を務められ、全国各地でサンクチュアリ計画に携わってこられた方です。連盟の会員には1970年代から登録していただき、今年2月にご自宅をバードピアとしても登録していただきました。今回はぜひ庭を紹介したいとのことで、都心部にあるご自宅の概要や、そこを訪れる生きものについてご紹介いただきました。



●都心の高層ビルを見渡すバードピア

ご自宅は、新宿から徒歩20分ほどの台地上にあり、高層ビルが見渡せる場所にあります。お庭の歴史は70年を超え、20年前に家を建て替える際、庭は残したまま工事したとのこと。大きなカキノキやヤブツバキ、エノキなどが葉を広げるこの庭で、セツブンソウから始まり、ニリンソウ、フタリスズカ、ハンゲショウ、ヒガンバナと、野草が自然に入れ替わっていきます。

庭のバードフィーダーには、キジバト、スズメ、メジロ(写真1)、シジュウカラ、ヒヨドリが頻繁にやってきて、シジュウカラやヒヨドリが繁殖したこともあるとか。建て替えた翌年の秋にはツミの若鳥がやってきて、スズメ2羽を食べていったとのこと。その日はさすがに小鳥が1羽も来なかったそうです(写真2)。

野鳥以外にモンシロチョウやツマグロヒョウモン、コマルハナバチ、ホソヒラタアブなどの昆虫類を始め、アズマヒキガエル、ヤモリなどの両生・爬虫類がすんでいます。しかし、最近はジョウビタキや TENTUM シ類が姿を見せなくなり、一時は爆発的に増えたアオドウガネの幼虫に卵を産むツチバチ類も、激減しているそうです。



写真1 手製の水場を利用するメジロ



写真2 庭にやってきたツミの若鳥

●お庭の生きもの調査にご参加を！

小河原さんが理事長を務める NPO 法人生態教育センターでは、「お庭の生きもの調査」という市民参加型の調査を行っています。庭を動かない定点として観察することにより、「いなくなった」という生きものの増減が評価され、都会や市街地の生物多様性の保全に役に立つという試みです。4月から調査が始まりますので、皆さんもお庭の生きもの調査にご参加ください！

【第12回お庭の生きもの調査2026】

個人宅の「お庭」を対象とした全国規模の市民参加型調査です。生きものを見つけたら、PC やスマートフォンからご投稿ください。専門家が分析し、結果を公表します。生きものを見分け方や生きものを呼ぶ庭づくりについても紹介しています。

日時：2026年4月1日(水)～11月30日(月)
場所：全国、公式ウェブサイト上(QRコード)
申し込み：ウェブサイトより調査員登録
主催：「お庭の生きもの調査」事務局
(NPO 法人生態教育センター内)

問い合わせフォーム：<https://www.wildlife.ne.jp/ikimono/ask/>

お庭 Garden of Wild Life Watch の生きもの調査



連盟小鳥用巣箱のご紹介



連盟の取り扱い巣箱 3 種

日本鳥類保護連盟では、2012 年より、連盟のオリジナル商品として小鳥用巣箱を製作販売しています。これまで継続的に改良を重ねてきました。今回はその特色について改めてご紹介します。

特色 1 数年使用できるよう、丈夫で長持ちです

巣箱の最低限の耐用年数は冬から翌秋までの 1 シーズンです。ですが、環境と手入れによっては数年の間使用可能です。せっかく架けた巣箱、1 年で捨ててしまうなんてもったいない。数年間の使用に耐えるよう、連盟の巣箱は丈夫に作ってあります。丈夫な理由のひとつは、板厚が 15mm と一般的なものより厚いことです。ホームセンターで販売している一般的な板の厚さは 12mm ですので、それよりかなり厚くなっています。

使用している釘はステンレスのスクリー釘。巣箱は緩みや割れがなく、釘も錆びません。木の幹に固定するのはシュロ縄で、ぐらつきがなくしっかり固定できます。丈夫なこと、しっかり固定できることは、鳥たちの安心材料にもなり、利用率が高まります。毎年架けている新宿御苑の母と子の森では、巣箱間の距離を 10m 程度離して十数個を架けていますが、それでもかなり高い利用率（半分くらい）となっています。

特色 2 子どもたちが作ることを考え、安全で安心です

愛鳥活動や環境教育の一環として、子どもたちが工具を使って組み立てることが多い巣箱（写真、QR コード）。工作に慣れていない子どもたちでもケガせず組み立てができるよう、製材や穴あけの際に表面に出る細いケバをやすりなどで丁寧にとっています。材の角や表面も軽く研磨をかけていますので、小さなとげが刺さりにくくなっています。

金づちで釘を打ち込むときに、慣れていない子どもですと、まっすぐ釘を打ち込むのが難しいです。釘が曲がってしまったり、それを直そうとしたりするとうまくいかなかった経験、大人の皆さんにもあるのではないのでしょうか。このことはケガの原因にもなりますので、連盟小鳥用巣箱の組み立て用キットには、釘が入る側の板に 2 mm の下穴をあけ、釘穴の位置に印をつけて簡単に釘を打ち込むことができるようにしてあります。

特色 3 長持ちさせる工夫や組み立て・設置の際の注意書きがついてきます

鳥に気に入られるかどうかには、コツがあります。設置場所や周囲の環境など、経験上、鳥の利用率が高い設置の方法や、毎年の巣箱管理方法などについて書かれた小さな取扱説明書が付録としてついてきます。

連盟では材料費や人件費などの上昇を受け 4 月から連盟小鳥用巣箱の価格を改定します。サントリー育林材利用巣箱は価格据え置きです。今後も引き続きご利用をお願いいたします。

会社やお店の庭をバードピアにしたいという方、自宅で小鳥の繁殖の観察をしたいという方、小学生向けに愛鳥教育を始めたいと考えている先生、来年の繁殖シーズンに向け今年の冬に連盟小鳥用巣箱をかけてみませんか？

【新宿御苑巣箱プログラムの動画】



【オンラインショップ（巣箱）】



写真 連盟のイベントで巣箱を組み立てる子どもたち

私たちが 自然保護活動から 学んだこと その1

—第59回

全国野生生物保護活動発表大会 発表校—

第59回 全国野生生物保護活動発表大会
(2025年11月開催)で受賞した学校から、
自然保護活動から学んだことを
紹介いただきました。
今回から3回にわけて掲載します。

■ 環境保全の重要性を広める生徒主体の継続的な ■ ビオトープ活動

■ 福島県 福島大学附属中学校

■ 福島大学附属中学校では、生徒の発案をきっかけに校
■ 内の中庭にビオトープを整備し、身近な自然を通した探
■ 究的な学びを進めてきました。生徒たちはシジュウカラ
■ やトンボなどの生き物呼び込むことを目標に、校内の
■ 環境や生息する生きものについて調べ、学年を問わず全
■ 校生で協力してビオトープを作成しました。ビオトープ
■ の管理では、水位低下や猛暑といった課題に直面し、原
■ 因を探り、記録や改良を重ねることで、環境を維持する
■ 難しさと工夫する大切さを学びました。また、調査や自
■ 由研究を通して、生物多様性や外来生物、水質や気象条
■ 件などを科学的に捉える視点が養われています。活動は
■ 校内にとどまらず、福島県内の地域や学校との交流や発
■ 信へと広がりました。生徒たちは、自ら考え、行動し、
■ 伝える経験を重ねること
■ で学びに向かう力を高め、
■ 「ビオトープを通して、附
■ 属中から全国に環境保全
■ 活動を広めていく」とい
■ う目標をもって日々活動
■ をしています。



■ みんなで守ろう！ ■ わたしたちの町のブッポウソウ

■ 岡山県 高梁市立川面小学校

■ 川面小学校では、地域にすむ絶滅危惧種ブッポウソウ
■ を対象に、命と自然環境について探究的な学びを続けて
■ います。ブッポウソウを含む野鳥観察をきっかけに、身
■ 近な場所に多様な野鳥が生息していることに気付き、「自
■ 分たちにもできることがある」と巣箱づくりに挑戦しま
■ した。翌年、設置した巣箱で実際に営巣が確認されたこ
■ とで、子どもたちは大きな感動を覚え、観察や調査を通
■ して、ブッポウソウが多様な昆虫に支えられて生きて
■ いることや、生態系のつながりを理解していきました。巣
■ 箱内の観察では、親鳥が雛を育てる過程を見守り、命の
■ 尊さや親子の絆を実感として学びました。また、中学生
■ や地域の人々との交流・発信活動を通して、学びが世代
■ や地域へと広がり、伝える力や協働する力も育ままし
■ た。ブッポウソウを通した学びは、子どもたちの「もっ
■ と知りたい!」「やって
■ みたい!」という思いが
■ 郷土愛と科学的な深め、
■ 将来の持続可能な社会づ
■ くりに貢献するものと確
■ 信しています。



■ ナゴヤダルマガエルの保全に向けた ■ 水田利用と管理体系の構築

■ 愛知県 愛知県立佐屋高等学校

■ 佐屋高校科学部では、水田生態系の保全に関する研究
■ 活動を行っています。活動を通して、希少種のナゴヤダ
■ ルマガエルが越冬や生活の場として、水田中央を流れる
■ 土水路や稲わら、雑草のある環境を選んでいることを明
■ らかになりました。調査を続けていると、冬期の水田利
■ 用や田起こしの深さ、土水路の雑草管理など、人の水田
■ 管理の方法が生物の生息に大きく影響することに気が付
■ きました。特に、土水路内の雑草は管理上取り除かれるこ
■ とが多い一方で、生物にとっては隠れ家や住处となり、
■ 生物多様性を支えていることを学びました。こうした研
■ 究から、多少、草がある方がよいと考え、生物と共存す
■ る水田環境の在り方を追求しました。また、自然教室や
■ 上下流交流を通して、水田生態系の大切さを地域や次世
■ 代に伝える活動にも取
■ り組んでいます。今後
■ も、生物で賑わう稲作
■ と水田環境を目指し、
■ 生態系の保全に関する
■ 研究を続けていきます。



全国一斉テグス（釣り糸）拾い 2025 報告

●実施概要

呼びかけ期間：2025 年 5 月 1 日～ 10 月 31 日

場所：全国の釣りが行われている海岸、河川、湖沼、池、ダムなどの水辺

方法：水辺を歩き、放置されているテグス・釣り具を回収。あわせて被害鳥がいないかを調査しました。回収は実施可能な範囲で行いました。回収後、テグスとその他の釣り具に分別・集計し、所定の用紙で報告していただきました。

●回収したテグス・釣り具

回収されたテグスの総量は 567g でした。1g = 13m に換算すると 7,377m になります。この中には含まれていませんが、ゴミと一緒に回収したためテグスを分別できない事例や、手が届かず回収できなかった事例が報告されています。テグス以外は、ルアー、ワーム、おもり、釣竿などが回収されました。

●被害鳥の報告

2025 年は 2 例のテグス被害鳥報告をいただきました（表）。皆様から寄せられたテグス被害の状況は、テグス被害情報（連盟ブログ）や SNS に掲載しています。



写真 1 足にテグスが絡まったカンムリカイツブリ

場所	被害鳥	羽数	被害状況
神奈川県 横須賀市	カンムリ カイツブリ	1	足にテグスが絡まっていた（写真 1）。この後、発見者によりテグスは外され、保護施設に保護されました。
兵庫県 芦屋市	ユリカモメ	1	嘴からテグスが出ていた。釣り具を飲み込んでいる可能性あり（写真 2）。



写真 2 テグスが嘴に絡まっているユリカモメ



テグス拾いの様子（左）と回収したテグス（右）（神奈川県支部より）

●実施箇所

報告は下記の 9 地点からいただきました。内訳は以下通りです。総勢 156 名の方にご協力をいただきました。

<都府県内訳>

東京：1 神奈川：1 富山：1 福井：1 愛知：1
広島：4



●テグスによる野鳥被害が取り上げられました

2025 年 9 月 18 日、釣り糸（テグス）による野鳥被害の問題が読売新聞で取り上げられ、日本鳥類保護連盟も取材に協力しました。

プラごみ被害 初の調査



※都道府県別の被害報告件数

都道府県	被害報告件数
千葉県	10件
北海道、東京都	8
長崎県	6
神奈川県	4
新潟県、埼玉県、静岡県、大阪府、広島県	2
宮城県、福井県、石川県、富山県、愛知県、岐阜県、京都府、奈良県、徳島県	1

絡まりや誤飲… 絶滅危惧種も

釣り糸などによる野鳥の主な被害例と件数（複数報告あり）

被害例	件数
釣り糸の絡まり	38件
誤飲・誤食	9
ルアーが刺さる	6
漁網への絡まり	6

日本鳥類保護連盟の会報「鳥の会」は、昨年度（2024年度）に全国の野鳥被害を調査し、その結果を報告しました。調査の結果、釣り糸による被害が最も多く、絶滅危惧種にも被害が報告されました。釣り糸による被害は、野鳥の足や翼に絡まり、飛行能力を失ったり、誤飲・誤食による被害や、ルアーが刺さるなど、様々な被害を引き起こしています。また、漁網への絡まりによる被害も報告されています。調査の結果、釣り糸による被害の防止は、野鳥保護にとって非常に重要な課題であることが明らかになりました。日本鳥類保護連盟は、釣り糸の回収活動や、釣り糸の正しい扱いに関する啓発活動を通じて、釣り糸による野鳥被害の防止に取り組んでいます。



テグス被害情報
（連盟ブログ）



釣り糸（テグス）
による野鳥被害
（読売新聞オンライン）

2025 年度のテグス拾いは、下記の皆さまにご協力をいただきました。

藤前干潟協議会 様、ぬまくま探鳥会 様、連盟 神奈川県支部、連盟 富山県支部、連盟 福井県支部、
連盟 広島県支部芦田川分会、連盟 広島県支部三次分会

支部会議と支部交流会の報告

●支部会議について

連盟事務局長 藤井 幹・文

日本鳥類保護連盟には支部があります。釧路支部、岩手県支部、宮城県支部、茨城県支部、千葉県支部、神奈川県支部、山梨県支部、富山県支部、石川県支部、福井県支部、連盟京都、岡山県支部、広島県支部、山口県支部の14支部で、それぞれの支部で自然保護のための活動や啓発活動を行っています。これらの支部と連携をとっていくため、活動内容の共有や課題を話し合うことを目的として支部会議を毎年実施しています。

令和7年は12月11日、連盟本部事務所において支部会議を実施しました。釧路支部、福井県支部、神奈川県支部が対面で出席したほか、オンラインで岩手県支部、富山県支部、連盟京都が出席しました。各支部の活動紹介のあと、主だった議題はやはり会員獲得についてでした。これは本部だけでなく、各支部も悩みの種となっています。高齢化が進み会員が減少しているのは連盟だけではないと思いますが、インターネットの普及で情報収集が容易になった現在、観察会に参加して識別点を学んだり、情報を得たりする必要性が無くなってきたことで、会費を払って会員になるメリットを感じられない人が増えてきたということもあります。連盟では普及啓発のための情報発信や環境教育はもちろんのことですが、鳥類保護のために活動をし、国内外で自然環境保全に貢献していくことが連盟の存在意義にもなっています。その活動を持続するためには会員によるサポートが必要であり、それを理解してもらうことも重要だと考えています。話し合いの中でも会員間のつながりの不足もあげられました。以前と比べると発表会など会員間の情報交換の場が減っているという反省点もあげられましたので、今後はより一層情報共有に力を入れ、会員が一緒になって活動できるような透明性のある団体を目指していきたいと考えています。

●第7回支部交流会について

連盟普及啓発室 吉田裕樹・文

10月18、19日、石川県主催で富山県・福井県支部を含む3支部の代表と、本部から会員担当の私が羽咋市の休暇村能登千里浜に集まり、第7回支部交流会が開催されました。支部交流会は前記の支部会議とは異なり、活動報告とともに、普段直接交流のない支部会員同士が顔を合わせ、情報交換を行う貴重な機会です。昨年は能登半島地震の影響を考慮し、1年延期となっていました。

1日目は支部代表挨拶の後、支部会員であり長年ハクチョウ研究に携わってきた日本白鳥の会理事・川口雅登さんによる「巴知潟周辺のコハクチョウの分布と行動生態」の講話が行われました。その後、本部および各支部から活動報告があり、主催の石川県支部からは、石川県および能登9市町が環境省の「トキと共生する里地づくり取組地域」に選定され、令和8年度に羽咋市南潟地区でトキ放鳥が決定したことが大きな話題となりました。これを受け、巴知潟周辺では今後放鳥準備が本格化していきます。

各支部共通の課題として会員の高齢化が挙げられ、本部としても、より若い世代に連盟の活動を知ってもらえるよう取り組みを進めていくことを共有しました。

2日目はトキ放鳥予定地の巴知潟を訪れ、コハクチョウが飛来する湿地環境を観察しました（写真）。数年後、この地にトキが舞う日を楽しみにしながら、交流を深めた2日間となりました。来年度は富山県で開催を予定しています。



写真 トキを放鳥する予定の羽咋市南潟地区を訪れました

連盟だより

第2回子ども鳥博士 参加者募集

日時：5月16日（土）9時～15時

会場：鶴沼海岸・江の島周辺（野外）※ 午後は室内で行う予定

集合：9:00 までに小田急線片瀬江ノ島駅改札前

内容：観察会（午前）、野鳥クイズ・工作（午後）

※ 内容は変更になる場合がございます。

対象：小学生20名（応募多数の場合は抽選）

参加費：1,000円（保険料を含む）

申込：4月30日（木）17時締め切り（5月8日までに結果をお知らせ）

Google フォーム（右のQRコード）よりお申し込みください。



「日本の野鳥カレンダー2027年」写真募集

【応募条件】日本国内で撮影した野鳥で、未発表の写真に限ります。ペット・家禽の写真は不可です。生息環境に手を加えたり、野鳥を意図的に呼び寄せたり、卵・ヒナ・営巣中の写真など、野鳥の繁殖や生息環境に悪影響を与えたと思われる写真も不可です。

【応募期間】2026年2月1日（日）～2026年4月30日（木）消印有効

【選考数】表紙および1月～12月の13点を採用致します。採用者にはカレンダー5部進呈と作品使用料20,000円をお支払い致します。

【審査結果】採用・不採用に関わらず2025年7月中旬頃までに直接通知致します。

詳しい応募要領と応募方法はホームページ（右のQRコード）をご覧ください。



テグス（釣り糸）拾い2026

全国の水辺を対象にしたテグス拾い活動を、下記の期間・要領で実施します。ご協力をお願いいたします！

期間：2026年5月1日（金）～10月31日（土）

場所：全国の釣りの行なわれている水辺（海岸、河川、湖沼池など）。

方法：釣りの行なわれている水辺を歩き、放置されているテグスや釣り具を回収します。実施の範囲については可能な限りで結構です。

報告：テグス拾い実施後、報告用紙に記入（あるいは同様の内容）のうえ下記担当へお送りください。皆様からの報告をまとめた後、機関誌、ホームページなどで紹介します。

※ 報告用紙はホームページ（右のQRコード）からダウンロードできます。



インフォメーション

岡山

作州野鳥の会 写真展 「冬季に見られる野鳥」

下記の日程と会場で開催します。

●会場：美作市大原公民館
（岡山県美作市古町1709）

日時：2月16日（月）～3月23日（月）
8:30～17:15（最終日15時まで）

休館日：土曜日、日曜日

問合せ：作州野鳥の会 会長 千原
電話：0868-78-2683

鳥取

米子水鳥公園ネイチャーセンター 主催イベント

●手作り自然教室「羊毛フェルトでヒーリングバードを作ろう！」

内容：真ん丸でかわいい小鳥（エナガ、モズ、メジロ）の置き物を、羊毛フェルトで作ります。

日時：3月14日（土）10:30～12:30

対象：小学生以上定員8組16名（小学3年生以下は保護者同伴）・要予約・2月26日（木）9:00から受付開始

参加費：500円

●ヨシ刈り大会

内容：背が高く活力のあるヨシ原を育成するため、あらかじめ刈り倒しておいた園内の枯れヨシを回収して片付けます。

日時：3月22日（日）13:30～16:30

対象：作業できる方ならどなたでも・要予約・3月5日（木）9:00から受付開始受付

持ち物：汚れてもよい動きやすい服装、長靴、軍手、汗拭きタオル、水筒

●自然観察会「春のメダカ池を観察」

内容：春のメダカ池にいる生き物をつかまえて観察します。採集した生き物を持ち帰ることはできません。

日時：4月11日（土）10:30～11:30

対象：小学生以上がおすすめ。定員6組18名。要予約。3月26日（木）9:00から受付開始

持ち物：汚れてもよい動きやすい服装、長靴、汗拭きタオル、水筒

●手作り自然教室「野鳥のステンシルをしよう！」

内容：袋やTシャツなど無地の布に、型枠を使ってかわいい野鳥のイラストをいれてみませんか？

日時：4月19日（日）10:00～12:00

対象：小学生以上8組16名・要予約。4月2日（木）9:00から受付開始

参加費：500円

持ち物：Tシャツやハンカチなど、ステンシルしたい無地の布製品

問合せ：米子水鳥公園ネイチャーセンター
TEL：0859-24-6139

インフォメーションの情報募集

自然観察会・シンポジウム・集会・写真展など、イベント情報をお寄せください。掲載申込締切りは2026年5・6月号（5月1日発行）は4/30（木）までです。

E-mail：editor@jspb.org

使用済み切手・カード類提供のお願い

使用済み切手やカード類（パスカードは除く）を収集して現金化し、活動資金として自然保護に役立てています。切手は、消印も含めて封筒から切り取った状態でお送りください。なお、未使用切手、書き損じのハガキもよろしかったらお送りください。カード類（テレホンカード、図書カード、各種交通機関カード、ダムカード、文化遺産カード、ジオカード、ゲームカード）は、表面に



セロテープやホチキスを使用しないようお願いいたします。

（担当：岡安）

商品の注文について

商品のご購入は代金先払いでお願いしています。ゆうちょ銀行の定額

小為替、現金書留、郵便振替のいずれかで、商品名・個数・お届け先住所・氏名・電話番号（昼間の連絡先）をお書き添えのうえ、お申し込みください。なお、請求書、納品書を必要とされる場合は、担当までご相談ください。（担当：岡安）

バックナンバーの提供について

観察会等を主催する会員の方に、機関誌バックナンバー＋入会案内を無料でお分けしています（ただし、梱包送料はご負担いただきます。金額についてはお問い合わせください）。ご希望の方は、①お名前、②ご住所、③電話番号、④使用予定日、⑤希望数をご記入のうえ、FAX・郵便・e-mailのいずれかで、編集担当の吉田までご連絡ください。

会費の振替用紙について

振替用紙は、会費納入月の統一にあたり、年1回、3・4月号に綴じて

んでありますので、ご了承の程、お願いいたします。

広告募集

本誌では広告を随時募集しています。種類は、裏表紙カラー、本文カラー1頁、本文モノクロ1頁・1/2頁・1/3頁・1/4頁です。詳細は、編集担当の吉田まで、お問い合わせください。

編集後記

▼昨年は全国各地で「少ない」と話題になっていたツグミ。今年はどうなるかと思っていましたが、今季は例年どおりの「普通の冬鳥」として渡来していて、少し安心しました。先日、自宅近くの河川敷を散策していたら、3mほど先ですとガサガサしていました。鳥界の冬の風物詩といっても過言ではありませんね。

（吉田）

ご支援をお願いします

会費・ご寄付は下記の郵便振替口座へ
口座番号：00150-9-19214
加入者名：公益財団法人 日本鳥類保護連盟
※送金の内訳をお忘れなくご記入ください。

【年会費】

特別支援会員	1口	10,000円
個人正会員	1口	5,000円
家族会員	1口	1,000円
学生会員（学生・生徒）	1口	3,000円
法人会員	1口	20,000円

【一般寄付（愛鳥募金）】

当連盟の活動全般に有効に活用させていただきます。

【使途指定寄付】

シマフクロウ、サシバ、奄美大島の希少鳥類の保護など、使用目的を指定していただく寄付です。

詳しくはHPをご覧ください。

<http://www.jspb.org/kihu>

なお、公益財団法人への2千円を超える寄付金は、寄付者の所得税などの税控除の対象になります。

主な連絡先のEメールアドレス

一般的な問い合わせ：webmaster@jspb.org
愛鳥教材について：岡安 hukuuu@jspb.org
調査・保護について：松永 research@jspb.org
機関誌について：吉田 editor@jspb.org
バードピアについて：岡安 birdpia@spb.org
会員・会費について：吉田 kaiin@jspb.org

私たちの自然

第67巻3・4月号 通巻No.663 2026年3月1日発行
定価1,200円（税込）（会員の購読料は会費に含まれます）

発行：公益財団法人 日本鳥類保護連盟

代表者：小宮輝之 編集長：中島慶二

編集主幹：吉田裕樹

編集委員：藤井 幹

松永聡美

ISSN 0910-6987

©2026 Japanese Society for Preservation of Birds

誌面デザイン・印刷：日本印刷（株）

公益財団法人 日本鳥類保護連盟

〒166-0012 東京都杉並区和田 3-54-5 第10 田中ビル 3F

TEL：03（5378）5691 FAX：03（5378）5693

ホームページ：<https://www.jspb.org/>

事務局業務時間 9:30～17:30（土・日・祝祭日休）



facebook：<https://www.facebook.com/jspb.org/>

X：<https://twitter.com/jspb2020>



facebook



X

日本鳥類保護連盟会員限定サイト

<https://www.jspb.org/members>

パスワード：jspb663

会員限定サイトでは『私たちの自然』バックナンバー

（過去1年分）閲覧と一部の商品を会員限定価格で購入できます！



第 80 回 愛鳥週間

「全国野鳥保護のつどい」

開催の お知らせ

令和 8 年度の第 80 回 愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」は、下記のとおり、東京都港区にある虎ノ門ヒルズフォーラムにて開催することになりましたので、ご案内いたします。

記念 式典

主 催：環境省、公益財団法人 日本鳥類保護連盟
後 援：文部科学省、林野庁
日 時：2026 年 5 月 10 日（日） 11:00～12:20
（受付：9:30 から）（予定）
会 場：虎ノ門ヒルズフォーラム 4 階ホール B
〒105-6390 東京都港区虎ノ門 1 丁目 23-3
アクセス：
○東京メトロ日比谷線『虎ノ門ヒルズ駅』中目黒方面
改札より直結、北千住方面改札より A2 出口
○東京メトロ銀座線『虎ノ門駅』B3・B4 出口
○東京メトロ千代田線・丸ノ内線・日比谷線
『霞ヶ関駅』A12 出口
○JR『新橋駅』より
徒歩約 11 分



虎ノ門ヒルズ
アクセスガイド

参加費：無料
参加者：50 名（予定）
参加条件：連盟会員であること
式典概要：（予定）
・開会
・主催者あいさつ
・野生生物保護功労者表彰
・総裁賞受賞者による基調講演
・閉会



式典の様子
（第 79 回全国野鳥保護のつどい）

毎年、5月10日から16日は
「愛鳥週間」
BIRD WEEK

愛鳥週間とは…

愛鳥週間（バードウィーク）は、1894 年（明治 27 年）、アメリカ合衆国ペンシルバニア州オイルシティ市の教育長を務めていたバブコック氏が、毎年 4 月 10 日に行なわれていた「植樹祭」と結びつけて小鳥を守ろうと、「バードデー」を考えたのが始まりです。

日本では、1947 年（昭和 22 年）に鳥類保護の実践と普及啓発を推進するため結成された鳥類保護連絡協議会（後の、日本鳥類保護連盟）により、毎年 4 月 10 日が「バードデー」と定められました。その後、日本では、地域によってはまだ積雪があるため、緑が多い時期の 5 月に、また、多くの人が行事に参加できるよう、5 月 10 日から 16 日までの 1 週間とし、名称も「愛鳥週間（バードウィーク）」と改めました。生物多様性の保全の重要性を普及啓発するとともに、保護・保全に向けた行動を起こすことにより、野鳥を含む自然と私たち人類が共生できる社会の実現を目指しています。

愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」

愛鳥週間の中心行事として、連盟総裁 常陸宮同妃両殿下のご臨席のもと、環境省との共催、文部科学省・林野庁の後援をいただき、全国から参加者を募って開催してきました。

参加にはお申し込みが必要です

参加ご希望の方は、2026 年 4 月 24 日（金）までに下記の参加申込フォームよりお申込みください。当日の参加申込みはできません。

第 80 回 愛鳥週間

「全国野鳥保護のつどい」参加申込みフォーム



第 80 回 愛鳥週間

「全国野鳥保護のつどい」問合せ先

〒166-0012 東京都杉並区和田 3-54-5 第 10 田中ビル 3F

公益財団法人 日本鳥類保護連盟

第 80 回 愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」係

TEL：03-5378-5691 E-mail：webmaster@jspb.org



公益財団法人 日本鳥類保護連盟
Japanese Society for Preservation of Birds

大阪で
一生分の鳥が見られる!? 特別展



わても
さてるで

大阪府の鳥
モズ

TORI

特別展

BIRD

2026/02/13 8:19